

『知覚の現象学』における「奥行き」と「世界」

小川 昌宏

一、『知覚の現象学』における「空間」論の一般的意味

『知覚の現象学』における奥行きに関する分析は、第二部「知覚された世界」の第二章「空間」において、「上下」、「運動」、「生きられた空間」のそれぞれに関する分析と並んで一つの節を割り当てられるかたちで試みられているが、それに先立つ第一章「感覚すること」の締めくくりには、後続する第二章の企て全体に関する総括的な予描が簡潔に提示されている。そこで、まずその部分の記述内容を検討し、『知覚の現象学』における「空間」論の一般的意味を確認することから始めよう。

この第二部、第一章の全体は、主に「感覚することは、世界をわれわれの生活のおこなわれる親しい場所としてわれわれに現前せしめる、世界との生きた交信である」という緒論の言葉（*Phénoménologie de la perception*, 64f.、『知覚の現象学』中島盛夫訳、一〇四頁）を綿密に裏づける作業にあてられている。メルロ＝ポンティは、感覚の分析を通じてカントやヘーゲルに代表される主知主義者における主体と世界との関係についての理論の問題点を検討し、その結論と

して、「感覚」が他と切り離されて体験可能な個別的「質 *qualé*」として存在しているのではなく、それ自身が或る特有の背景、或る既定の領野に属するものであるという事実を導出する。そして、感覚の背景、もしくは地平を形成するこの「対象も主体も措定されていない原初的な領野」が、「全体の要求に応じて機能的な値を配分する、総体的な形態」を形成しているはずであるということ、反省によって把握可能となる「総合的統覚 *apperception synthétique*」や「現勢的综合 *synthèse actuelle*」とは区別されるある種の別の総合の働きによってその領野がもたらされるはずであるということとが、確証されるべき推論として表明され（279, 二九五以下）、かかる総合の働きとその結果生じてくる空間の新たな相貌の究明が次節の課題であることが告知される。

空間論全体を貫くこの課題は、一見単純にみえる。しかしそれが単純にみえるのは、知覚とは切り離されてそれ自体として存在する感覚が取り上げられるという経験論的前提と、意識の働きの介入を色濃く暗示させる「総合」によって個々の感覚が統一化されるという主知主義的な前提とが、分析の出発点として暗黙のうちに議論の枠組みを決定しているように感じられるからであろう。だが実際には、扱われている事柄そのものはそれほど単純ではない。問題とされているのは、それ自体としての各々の感覚は、すでに出来上がった措定的な知覚体験に後から反省が加えられることではじめて対象として抽出可能となるにもかかわらず、反省的には再現不可能な何らかの方法で統一的な領野もしくは布置として成立させられているという事態である。あるいは、個々の感覚を統括的に纏めあげている反省的には再現不可能な秩序が、ただ単純に措定的な知覚を招き寄せるといっばかりでなく、そこに加わる反省の可能性をもまた基礎づけているという事態であるということができるかもしれない。メルロ＝ポンティに従うならば、彼自らが「原初的な契約 *contrat primordial*」および「自然の贈」*don de la nature*」（251, 三五五）と呼び、「秘蹟 *Grâce*」や「神が現実に現前す

る」)と「la présence réelle de Dieu」(245, 三四七)ともなぞらえている。かかる感覚的な領野それ自体に関する「非措定的・先客観的・前意識的経験 une expérience non-théologique, préobjective, et préconsciente」(279, 三九六)は、時間的な視点からは「反省が前提とし、利用している根源的な過去、かつて現在であったことのない過去」(280, 三九七)、「おのれにひとつの世界を与えたところの、「措定的な認識作用に比較して」さらにひそやかな、そしてつねに過去に属する作用」(324, 四五九)、「思惟よりも古い世界との交信」(294, 四一七)として特徴づけられるような極めて特異な経験である。空間がまずもってこのような前意識的な感覚領野として体験されるのであるかぎり、『知覚の現象学』の「空間」論は、まさに反省や反省をつつじて形成される措定的な認識を可能にしている。世界との根源的な接触 を語る作業として実現されねばならないことになる。すなわち「思惟されうるためには、世界はまず第一にすでに知られているはずであるし、私に対して存在しなくてはならない、つまり与えられていなくてはならない」(254, 三六一)のだとしたら、そのような先措定的な「世界」や「世界においてあること」をその原型的な具体相において記述し、そこで生起している事態そのものの構造へと立ち入ることが要請されることになる。

いかなる感覚も空間的であるというテーゼにわれわれが従ったのは、対象としての性質が空間のなかでしか思惟されえないからではなくて、感覚は、存在との原初的な触れ合いとして、感覚的なものによって示された実存形式の感覚主体による引き受けとして、感覚するものと感覚的なものとの共存として、それ自身、共存の場を、つまり空間を構成するからである。点のように孤立した感覚は存在しない。いかなる感覚もある領野を、したがって共存を予想していると、われわれはアプリアリに主張する...

一、奥行き

さて、それでは奥行きの知覚は、今述べたような空間それ自体の性格とどのように関わっているのだろうか。奥行きの知覚が、上下や運動の知覚と比較して空間に関するより原初的で、根源的な了解を与えているのだとしたら、それは何に帰因するのだろうか。『知覚の現象学』のメルロ＝ポンティは「奥行きは、空間の他の諸次元よりも直接的に世界に関する先入見を退け、世界が涌出する原初的経験を再発見するように、われわれを強いる。奥行きは、いわばあらゆる次元のうちで最も『実存的』なものである」(296, 四二〇)という言葉で、その特権性を説明する。奥行きは、幅や高さとは違って、「諸事物およびその諸要素が並存しあう *se juxtaposer* 次元」ではなく、「それらが互いに包含しあう *s'envelopper* 次元」(306, 四三五)であり、まさしく「あきらかに事物ではなく、パースペクティヴに属す」(296, 四二〇)ことで、「主体と空間との絆 *le lien du sujet à l'espace* を直接顕わにする」(309, 四三九)とされる。つまり、措定的に知覚された個々の事物やそれらの射映的な表象が成立した後に、それら相互の関係として後からそこに付け加わるのではなく、身体 主体がつねにその都度世界のうちに占めている「投錨点 *points d'ancrage*」から展開される世界そのもののあり方の先行的な枠組みとしてその都度の光景を規定し、そこに与えられることになるすべての事物が相互に繰り広げる関係を予め規定する点にこそ、奥行きの独自性が見出されるのである。「実存的」ということのさしあたりの意味は、「遠 近」を表わす端的な基準軸として視覚世界を切り開き、個々の事物を統一的な秩序のもとに迎え入れ、配置することで、それらに「空間的」であるという属性を割り当てるといつ点にあるといつべきである。

しかし、さらに重要なのは、奥行きがすべての事物体験に先立つ先行的な世界の開け、もしくは世界との接触を体現

しているにもかかわらず、つねに事物の体験の後から、ないしはそれと同時に、それを媒介としてしか獲得されないといいことである。奥行き知覚は、「自ら獲得したものの背後に隠れてしまふ être dissimulé sous ses propres acquisitions」(282, 四〇〇)という性質を免れることはできない。事物ではなく世界そのものとの関係を表現するという意味では、直接的に視覚体験や触覚体験において与えられる幅、高さ、運動等といった空間的事象からは明確に区別されるという一方で、幅や高さに関する基準との連関のうちにおかれることでしか、奥行きの経験が成立することはないとされる。

ある空間基準の構成は、つねに与えられた他の空間基準を前提とする。空間はつねにそれ自身に先立つということである。しかしこの言明は挫折の単なる確認ではない。それは、空間の本質と、空間の理解を可能ならしめる唯一の方法とを、われわれに教えるものなのである。いつでも「すでに構成されている」ということは、空間の本質に属することであり、世界を伴わない知覚のなかにひきこもることによつては、絶対に空間は理解されないであろう。

(291, 四一三)

ここで主張されているのは、原初的な世界体験が、ただそれぞれが独立の次元をなす諸々の基準軸の共存、反転、指示関係を通じてのみ、体験可能になるということである。すなわち、世界との原初的な接触を表わす遠近の基準としての奥行きは、幅や高さといった他の基準を指示し、ないしはそれらと反転しあつたことで一つの基準として獲得され、まさしくそれら他の基準が相互に織りなす奥行きとして体験されるということである。根源的に先所与的な世界は、かかる相互指示的な基礎づけの構造をつうじて、それ自体として、つまり措定的な現前のうちにもたらされないまま、示し出される。このことが意味しているのは、「自己自身に対して自己の姿を隠す se dissimuler à soi-même」(291, 四一三)

の弁証法」や「自己自身を忘却し、そのことで『物』の構成を可能ならしめること」がすべての知覚に関して当てはまる根本的な原則であるかぎり（71、114）、奥行き知覚はあらゆる知覚の原型としての意義をもつということばかりでなく、奥行きが、指示・反転関係をつうじて、他の基準に対しても、「世界との根源的な接触」であるという「実存的」意義を分け与えるということでもある。つまり、相互的な指示・反転関係において実現される「自己自身を隠すこと」をつうじて「それら他の諸次元もまた、根源的な意味においては『実存的』諸次元なのである」（309、四三九）という事実が見出されることになる。

原初的な水平基準は、われわれすべての知覚の地平上にある。しかし、或る明白な知覚 *une perception expresse* についてこの地平に到達することも、これを主題化することも、原理的に不可能なのである。（293、四一六）

いわゆる運動の基準点が、現勢的認識のうちに措定されず、いつでも「すでにそこに」あるといつことは、それらにとって本質的なことである。それら基準点は真正面から知覚に提示されはしない。それは知覚を取り囲むのであり、その結果がまったく既成のものとしてわれわれに現われるところの或る前意識的な作用によって知覚にまといつくのである。（323、四五八）

奥行きに関する以上のような捉え直しを通じて、メルロ＝ポンティは、「アプリアリな形式」という伝統的な捉え方から空間を解放し、そこに新たな現象学的規定を与えるに至る。奥行きを「横から見た幅」へと還元する主知主義や経験論者の見解（294、296、四一八、四二一）だけでなく、幅や高さといった他の諸基準に対する奥行きの原初性を指

摘するアランやラニョーの立場さえもが退けられることになるのは(309, 四三九)、彼らが共通して空間をひとつのプリオリで客観的な形式的統一体として捉えるという前提に縛られているからである。メルロ＝ポンティ自身によって見出された空間とは、身体 主体がその都度占める投錨点や世界への態度に応じて表情を変え、別様に刷新されながらも、現象野そのものがつねに諸々の相互に異質な基準に則しつつ展開されるという事実を通じて垣間見られるような統一体なのである。

三、動機づけと移行の総合

奥行きとそこから導出される空間および世界に関する『知覚の現象学』における根本的な捉え方そのものは、後期の存在論に至るまで保持され続けているといえる。後期のメルロ＝ポンティが、奥行きを「存在へと至る通路」として主題化する際には、他の諸基準と、さらには諸々の質や感覚もしくは事物との間に奥行きが繰り広げるさきほど述べたような独自の指示・反転構造が念頭に置かれていると考えられる。この 指示・反転の關係を通じて自らを隠す原初的な次元 として獲得される奥行きが、端的な次元性そのものとしての存在への通路を切り開くことになるのである。しかし、『知覚の現象学』の奥行き論の特徴的な点は、あくまでも奥行きそのものの知覚が、「動機づけ motivation」や「移行の総合 synthèse de transition」というきわめて現象学的色彩の強い概念装置によって説明される点にある。冒頭で、『知覚の現象学』の空間論が、先所与的な感覚領野を前意識的、非措定的な仕方で構成し、さらには反省の「元手」としてそれを基礎づける総合の解明として企てられているという事実を確認したが、『知覚の現象学』のメルロ＝ポンティは、

奥行きの独自性とそこから導出される空間経験、世界経験の独自性を、敢えて現象学の枠内で説明する道を選択しているというべきであろう。そこで次に『知覚の現象学』の奥行き論の核心をなすともいふべき「動機づけ」および「移行の総合」という概念について簡単にみていくことにする。

そのうちまず「動機づけ」についてであるが、メルロ＝ポンティは、基本的に「奥行きそのものの知覚は、見かけの大きさ 両目の収斂 網膜上の像の差異」といった 標識 *signes* をつづじて獲得される」という生理学的事実を半ば全面的に受け入れる。ただし、彼が強く主張するのは、それらの標識が奥行き知覚の原因ではなく、動機であるということなのである。見かけの大きさ 両眼の収斂 等の標識は、それら自体としては「明瞭に意識のうちに現れることがない」(57, 九五)ままに相互的連関を形成する。それらが相互的な連関を形成することで、奥行きとして知覚される距離が明確に意識されるようになり、最終的には、確定的な「距離の知覚」が獲得される。しかし、それら標識は、それらの連動がもたらすことになる距離の知覚の外部に存在しながら、その「見えない原因」として機能しているのではなく、「意識のうちに現在している être présent」(299, 四二五)とされる。ただし、それは、あくまでも「非措定的経験 *expérience non théorique*」(299, 四二五)という資格における現在であるとされるのである。たしかに、各標識は、距離の知覚が獲得された後にも、それを構成する顕在的部分的諸要素として意識されることこそないのだが、距離の知覚の成立と共に「隠されたかたちで暗黙のまま」(99, 九九)抽象的契機として非措定的に「現在する」というわけである。おそらくフッサールの用法を念頭において与えられていると考えられる「動機とは、その意味によつてのみ作用する先件である」という端的な規定や、諸標識の「意味のうちに奥行きへの組織化がすでに含まれている」がゆえに、それらは「奥行きへの組織化の動機となる」(300, 四二五)といったメルロ＝ポンティの説明はかならずし

も分かり易いものとはいえないが、彼の主張の力点は、因果的な時間系列の前に属する事象が後から成立する事象を先取りし、後者によって決定されている という一種の時間の逆転構造、あるいは換言すれば、背景の領野につき従うことで意味を受け取るのではなく、意味を分泌することで領野を背景として纏めあげる という主体性特有の自発性の構造にあるといえよう。つまり「動機づけられた現象が実現されるにつれて、動機づける現象との内的連関も浮びあがり、単に動機づけられた現象が動機づける現象に継起するのではなく、これを明らかにし、これを理解せしめ、あたかもそれ自身の動機に先だって存在したかのように見えるようになる」(61, 101)ということである。そして、「この「動機づけ」の連関を成立させているのが、非意識的で非統覚的な総合としての「移行の総合」であるとされる。

「移行の総合」については、「対象の統一を破壊する瞬間に新しい次元においてそれを再建する」(総合(39, 71))、ないしは「諸々の非連続的パースペクティヴを結びつけるものではなく、ひとつのパースペクティヴから他のパースペクティヴへの『推移 passage』を実現する」(総合(307, 436))、といった端的な規定が与えられている。メルロ＝ポンティが対象一般の統一性に関して、「対象はひとつの不変の構造であるが、パースペクティヴの変化にもかかわらず en *depit* *cependant* というのではなく、この変化において dans またこの変化を貫いて à *travers* *cependant*、ということである」(106, 163)と語る際に、そこで語られているような統一性を形成している総合が「移行の総合」であるといえる。この「移行の総合」は、まずもって時間の総合として実現される。或る一定の時間軸を過去から未来へと向かってA、B、C、という瞬間が経過する際に、それぞれの後続の瞬間は、前の瞬間から自己自身を差異化することで自らをその都度の現在における瞬間として実現する。それと同時にAは、Bの過去把持として保持された自らの「射映 profil」としてのAとの同一性を「過去そのものと過去把持された過去の関係」へと構築し直すことになる。さらに、時点Cへ

と至る際にはそこに過去把持の過去把持としてのA'が付け加えられることで、A A' A''という同一性の系列が新たに再編成される。そして、それと同時に、時点Aにおいてもすでに「未来予持された未来と未来そのもの」の関係として成立していたBの同一性の系列に「Cによって過去把持されたB」であるB'が付け加えられることでBの同一性の系列全体も新たに再生されることになる。このように、時間の総合とはそれぞれの瞬間を断ち切ると同時に、他の瞬間によるその瞬間に対する未来予持と過去把持 からなるその瞬間の同一性の系列を不断の変化のうちに編成し続ける綜合である。そして、その系列が指示する収斂点として当の瞬間の同一性が媒介的に保持されることで、時間自身の統一性も確保されることになるのだが、このような差異を内部に含み込んだ時間特有の自己構成的綜合を、メルロ＝ポンティは「移行の総合」の原型として提示する。後にヘルトがフツサールの時間論の根本構造として取り上げ直すことになる、過去把持特有の「滑り去らせつつ 留めおくこと」という構造、すなわち「把持することは掌握することであるが、ただし距離を隔てて掌握することである」(484, 700)という事実をもって、メルロ＝ポンティは「移行の総合」の根源的な生起とするのである。そして、「この時間における「移行の総合」は、根源的な距離の現象として自らの過去 現在 未来 という次元を空間へと分け与え、¹⁾「あそこ」という次元を現出させることで、時間と空間とが「共時的なもの contemporains」という関係を形成することによって成立する。「現前性の領野」を切り開くとされる(306f., 四三六)。メルロ＝ポンティは、「このような「移行の総合」による時間と空間との反転関係に言及し、それをもとに「生ける現在 présent vivantを発見し直す」というように、「奥行きないしは距離が直接見られるものとなる」(307, 四三七)というテーゼを導出する。つまり、時間の総合としての「移行の総合」は、諸標識を纏め上げることで奥行きとしての距離を現出せしめ、空間を切り開くというばかりでなく、自らが実現する「動機づけ」による転換の秩序に已

れ自身を適応させることで、切り開かれた空間のうちに自らの紡ぎ出す距離の運動を投影することになるのである。

四、結論＝世界のうちにあることとしての主体性

メルロ＝ポンティは、「移行の総合」を「炸裂 éclatement」(479, 六九三)を通じての統一性の再創造とみなすことで、時間を意識の固着した反復構造から解放する。メルロ＝ポンティが敢えてフッサール流の現在優位の時間図式を援用するのも、彼がそれぞれの瞬間の「個性 individualité」、つまり他の瞬間とは代替不可能であるという意味での唯一性を確保するためであり、「不滅の現在 présent perpétuel」(451, 六四六)としてのその都度の「生ける現在」を、理念的に確定された現在の無限の反復可能性 としてではなく、継起する現在によって引き受け直され、意味づけ直される 生きられた過去 として再生しようとするからなのである。その意図の核心は、意識の時間を支配する形式的な原理を、主体がつねにその都度の現在において引き受けざるをえない主体性としての自己実現の事実性へと置き換えることにあり、時間自身が「脱 自 ek-stase」を通じて自らの以前のあり方を乗り越えつつ自己構成する経緯を、それが生起する瞬間において内部から捉えることにあるといふべきであろう。そして、そのことを通じて、時間の総合は、世界体験の超越論的前提である純粹意識のアプリオリな総合としてではなく、世界のうちにつねにすでに織り込まれた主体性の原事実的構造として捉え直されることになる。時間、そして空間は、経験に先立つ経験の前提としてではなく、その都度の経験によって乗り越えられつつ、その 乗り越え という行為の軌跡を同一性のうちに保つことで主体性を主体性として確保する主体性の最終的な拠り所として、生きられるのである。

時間は、最終的に「未来への推進ならびに移行としての時間」による「諸々の現在の展開した系列としての時間」への「自己触発 *affection de soi par soi*」として規定されることになるが（487, 705）、その場合の「自己触発」は、世界の外側で展開される意識の自己完結的な運動性を意味するわけでもなければ、自己の内部から異質なものであり、絶対的に新たなものでもある 外なる世界 へと飛び込んでいく、主体の盲目的な自己 外化の自発性を意味するわけでもない。しかし、それは、自らが予め用意した枠組みを携えつつ、未知なる世界を既知性へと解消し続ける作業からも区別される。「私は私の感覚野・知覚野を携えて、そして結局はあらゆる可能的存在の型 *typique*、世界に対する普遍的な構え *montage* を携えて、世界を迎えにいく」（490, 711）とメルロ＝ポンティが主張する際の「可能的存在の型」や「普遍的な構え」とは、世界のうちに「私」が存在することで世界それ自身が自らに示すことになった自己自身の骨格の素描のようなものであり、それらは、「私」が新たに世界へと脱却し、「私」の世界体験が措定的な意味に結実する際に、半ば事後的に、しかも、結局はその措定的な意味に隠れてしまうことで消極的に普遍的形式としての資格を保つという仕方で見られることになるのである。「自己による自己の触発」といわれる際の「自己」とは、「私」であると同時に「世界」でもあり、それゆえに「自己触発」は、*être-au-monde* としてしかありえない「主体性」の、世界体験としてしかありえない「時間化」の構造を表現することになる。「世界は主体から分離されることはできない。しかしこの主体とは、世界の企投 *projet* にほかならないのである。そしてまた主体も世界から分離されえないが、この世界も主体が自ら企投する *projeter* 世界以外のものではない」（491, 713）という言葉はそのことを端的に裏づける。自己触発が要請する原初的で、不可避的な「自己自身からの距離」を、単純に 世界と主体との距離 として理解することはできない。それは、世界に突き動かされた主体がとることを強いられつつける自己自身からの距離であり、人間的主体

体を通じてしか自己を顕わにすることのない世界が「つねに自己自身からとらざるをえない距離である」といふべきであろう。そして、主体からの主体の距離は世界からの世界の距離を解消するために要請され続けるのであるにもかかわらず、二つの距離は永続的に重なり合い続けるという事実、すなわち個々の具体的な体験において、つねに世界と主体とが過不足のない調和の関係を創設するという事実のうちにこそ、世界と主体との根源的で解消しえない距離が暗示されているといふべきなのではないだろうか。事実、晩年のメルロ＝ポンティは、世界へと超越することが、世界から予め授けられた世界の枠組みを再発見することではなく、世界の意味を認識することが世界との距離を知ることではない、という主体性の逆説を、「自己へ帰ることと自己から出ていくことの同一性」と「直観的体験と距離との同一性」との「二重の指示連関」と呼び、主体と世界との間に繰り広げられる一致と距離、近さと遠さの関係をさらに掘り下げて追求していくことになる（VI, 165, 二〇一）。いずれにせよ、前意識的な次元で感覚視野に規則を与え、世界を空間的に現出させる奥行きは、これを主体と空間との間の隠された直接的絆として実現することで、主体と世界との解消しえない距離を常に非措定的に現実的な知覚世界のうちに導き入れていると考えられるのであり、「世界」と「現出する知覚世界」との間の現出しない差異を自らに現出することを禁じることでかろうじて痕跡として体験させると考えられるのである。

註

ヴァルデンフェルスは、この「先行的意味贈与」(Simvorgaben)の理論を、メルロ＝ポンティの全思想遍歴をつつじて維持

されるばかりでなく、彼を実存主義運動に属する他の思想家たちから区別する根本的徴表であるとみなす。

(vgl. *Phänomenologie in Frankreich*, S. 142ff.)

もちろん、「ここでの「実存的」という語に関する規定は、この語の全内包を言い当っているわけではない。「世界の中にあること」と「脱自」との両義性によって指示される「実存」の主体的 脱主体的性格については、結論部を参照していただきたい。

奥行きの「非感性的性質」に関しては、それを「夜の空間性」として論じた第二部第二節Dの実存論的分析(328-332, 四六四-四七〇)を参照。この箇所では、「夜の空間性」としての奥行きが「見えない空間」として「性的情緒的空間」や「神話的空間」との関連から取りあげられているが、意味や論理といった「見えないもの」の領域へと奥行き理論が拡張される後期の問題構成との接点という意味でも興味深い見解が提示されている。

すなわち、奥行きを客観空間が形成されるための根源的基準とし、そのために客観的距離(顔面と事物との距離)として奥行きを捉える点で、彼らが批判されるのである。

cf. *Barbaras, R., De l'être du phénomène*, p.241ff.

vgl. *Held, K., Phänomenologie der Zeit nach Husserl*, in: *Perspektiven der Philosophie*, Bd. 7 (1981), S. 185-301 (i. b. 203ff.)